教職大学院院生 A.K さんの感想.

本講演は、自分の幼少期のことを思い出しながら受けていた。自分が小学校、中学校の時でさえ、「死にたい」「消えてしまいたい」という言葉を発している子どもは周りにいた。そして、私もその中の一人であった。自分はどうしていただろうと考えたところ、やはり友達に何と言葉がけしたらよいかわからなかった。「私はずっと味方だよ」という言葉はよくかけていたように思うが、大人に相談する術などはなかった。また、担任に相談した際には、本人に許可を取らずにクラスメイトに周知されてしまって、相談することはよくないとさえ思った記憶がある。しかし、それでは取り返しのつかない事にもつながりかねないと強く感じることができた。今までは、子ども側の立場にもあったが、教師になるということは子どもたちと一番長く生活するということである。

今後、子どもに身につけさせたい力としてレジリエンスという言葉が印象に残った。何かに挫折したり傷ついたりしたことで、落ち込み、立ち直る力のない子どもはまだまだいるように思う。その力を身につけられなかったことで、大人になってから自殺してしまう人もいるのではないだろうか。私は、子どもの間だけでなく、大人になってからも健全に生きていけるような子どもを育てていきたい。そのためにも、レジリエンス教育は今後意識して取り組まなければならない教育だと感じている。子ども同士のつながり、親とのつながり、地域とのつながり、教師とのつながり、人は支えられて生きていることを自覚するだけでも生きる力とつながるように思う。今まで、具体的な手立てとしてどうすれば助けを求めることができるのかは教えられてこなかったように思う。これからは、子どもの自尊感情を高めるだけではなく、そのあとの対処の仕方も具体的に教えていく必要があると強く感じた時間であった。